

[第25回教育研究推進室ワークショップ]

英語で留学生に教える

——大阪大学大学院文学研究科における取組み

望月太郎

大阪大学文学研究科教授

2010年2月19日(金) 14:30~16:00

文学研究科127講義室

教育研究推進室では、平成21年度総長裁量経費によるプロジェクト「人文系大学院における留学生向け日英語カリキュラムの開発」(代表：羽賀祥二)の一環として、平成21年10月29日に大阪大学文学研究科を訪問し、和田章男教授(国際連携室長)、金水敏教授、須藤訓任教授と面会して、Erasmus Mundus Eurocultureプログラムにおける英語授業の実施、英語による授業のための全学FDなどについての説明を受けた。その際、英語による授業をテーマとした教育研究推進室のワークショップでお話いただく講師の紹介を依頼したところ、望月太郎教授を紹介いただいた。以下、2010年2月19日(金)の14時30分から約1時間30分にわたって開催したワークショップの概要を記す。

司会：お忙しいところをお集まりいただきどうもありがとうございます。今回は教育研究推進室25回目のワークショップということになります。本日は、人文学を英語でどう教えるかということで、最近、人文系の大学院でも授業を英語でやるようにという要請が外から結構あるわけですが、その課題について考えてみたいと思っております。今日は大阪大学の望月太郎先生にお話を伺いますが、その前に、研究科長からひと言ご挨拶をいただきたいと思っております。

和田：研究科長の和田でございます。今日は大阪大学の望月先生に来ていただきお話を伺えるということで、英語で授業をやる場合の問題点や、どのような意味があるのかなどを含めて、ぜひ私たちの参考にしたいたいと思っております。大阪大学の文学研究科は、私たちに先じて既に英語のコースをお持ちであり、その点について私たちは遅れを取っており非常に残念ですが、学ぶべき所はたくさんあると思っております。文学研究科、文学部の授業を英語でやるということに懐疑的な先生もおられるかと思いますが、これはグローバル30で既に私たちがやらなければならない事柄となっておりますので、各々自分の身に置き換えて、もし自分が英語で授業をやるようになった場合、どう対処したら良いのかということをごひこの場で汲み取っていただき、望月先生といろいろなディスカッションをし

て、自分の栄養、肥やしにしたいというふうに思っております。望月先生、本日は本当にありがとうございます。よろしく申し上げます。

司会：それでは、本日の講師であります望月先生につきまして、副研究科長の羽賀先生からひと言ご紹介いただきます。

羽賀：望月先生、今日はどうもありがとうございます。私たち教育研究推進室では、総長裁量経費をいただきまして、国内のいくつかの大学と韓国のソウル大学で、留学生教育もしくは外国語による教育について調査を進めてまいりました。大阪大学についても、昨年11月文学研究科の国際連携室にお邪魔しまして、ヨーロッパの大学と連携されての外国語による日本文化の授業の実践例、留学生担当教員の先生の論文作成法など、日本語教育、日本語の運用能力の向上のためのいろいろな実践例をお伺いしました。先月は、その留学生担当の鄭先生に来ていただき、日本語運用能力の向上のためのいろいろな実践例について、このワークショップでお話しいただきました。引き続き今月も、望月先生に来ていただき、英語教育の実践的な試みについてお話を聞けるということで、大変楽しみにしております。

望月先生は1962年のお生まれで、国際基督教大学をご卒業後、大阪大学の大学院に進まれ、その後徳島

大学、東海大学を経て、大阪大学文学研究科の准教授として赴任されました。哲学がご専門ということですが、現在は大阪大学の大学教授実践センターという所に勤務され、同時に文学研究科にも兼任准教授として務めておられます。哲学が専門ということですので、直接ご面識はありませんが、英語教育の最先端の試み

についてお話が伺えるということで、大変楽しみにしております。よろしくお願ひします。

司会：それでは、早速、望月先生にお話をお願いしたいと思ひます。それでは望月先生、どうぞよろしくお願ひします。

望月：ご紹介いただきどうもありがとうございます。望月です。今日はよろしくお願ひいたします。はじめに申し上げておきたいのですが、私は特に英語が専門ではなく、また英語が堪能なわけでもなく、皆さんの中には私よりずっと英語が堪能な方もおられると思ひます。ただ英語での授業を何回かやったことがあるというだけの話で、その私の経験の中から、特に私が皆さんに何かを教えられるというようなことはないと思ひますが、今日は皆さんとディスカッションをする中で、一緒に学び合うことができるのではないかとお願ひしております。ですから、そういう立場であるということをお断りしておきたいと思ひます。

名古屋大学の文学研究科の皆さんが、英語で、特に文学部関係の授業をするということに関して、どういう疑問や関心、問題点などを持っておいでなのか、順序が逆転するようですが、はじめに少しお聞きかせいただければと思ひます。どういう所に問題意識や疑問点等を持っておられるのか、はじめに出していただくと、それに対応する形で話を進められると思ひますが、いかがでしょうか。

和田：私が発言すると少し影響があるかもしれませんが、話の出発点ということで聞いていただければと思ひます。まず、日本の文学をなぜ英語でやらなければならないのかという疑問があると思ひます。私は意味があると思ひますが、議論のために申し上げます。もう1つは、英語で授業をやる場合に、英語を母語とする人が授業するようにやるのが良い授業なのかどうかということです。つまり、アジア人の私たちがするときには、固有のやり方があっても良いのではないのかというこの2点です。

望月：はい、どうもありがとうございます。そもそも文学を、特に日本関係の文学をなぜ英語で授業しなければならないのかという問題意識、また英語が母語でもない我々が、ネイティブスピーカーのように英語で授業をすることが良いことなのか、そのようなモデルで良いのか疑問があるということだと理解しました。

それは私も常々感じていることで、私も最初はそういうことに非常に懐疑的だったのです。ただ、いろいろ経験を積んでいく中で、そうでもないということが見えてきましたので、そのようなことを盛り込んでお話ししていきたいと思ひます。ありがとうございます。

はじめに、簡単に自己紹介をさせていただきたいと思ひます。私は先ほどご紹介いただきましたように、そもそも17世紀の西洋哲学を専門にしており、もともと英語よりもフランス語などを一生懸命勉強したものですから、勉強した期間から言うと、英語は第3外国語と思っているくらいなのですが、それでも最近は英語で授業をすることの方が多くなってきてしまいました。

また本来の研究対象とは別に、最近関心を持ってやっているのは、ここにも書きましたように、市民運動の思想とか alter-globalization、フランス語では altermondialisme と言いますが、そうしたもう1つのグローバル化を目指すという alter-globalization 関連のこと、また philosophical practice と呼ばれるものが最近ヨーロッパを中心に非常に盛んになってきていますが、これはいわゆる大学で研究する哲学ではなく、哲学をもっと市民社会に向かって開かれたものにしていう運動で、具体的には philosophical consultation とか philosophical counseling と呼ばれているもの、あるいは子どものための哲学とあって初等・中等教育段階で子どもたちと一緒に哲学をやるというようなもの、あるいは哲学カフェのようなものが、ヨーロッパを中心に非常に盛んになってきていて、こうしたものにも関心を持ってやっています。

それからどういう授業をやっているかですが、一般教育では「思想の世界」と呼ばれるものをやっています。専門では、所属が現代思想文化研究室という所になっているものから、現代哲学とか現代思想文化の講義や演習をしています。これからご紹介する英語でやる授業は Erasmus Mundus Euroculture という EU 諸国のプログラムですが、それに大阪大学が第3

パートナー、域外パートナーとして加わっており、そこに提供している現代日本思想の講義を英語で行なっています。

その他にもたまたま縁があり、去年タイのバンコクにあるチュラロンコン大学のBBA (Bachelor of Business Administration) courseで、philosophy and logicというコースを英語で教えるという経験をしましたが、「目からウロコ」と言いますか、非常に良い経験をしました。

チュラロンコン大学はタイの中でもトップ大学の1つで、100を超える国際プログラムが走っており、そのほとんどが英語で開講されています。このプログラムは、BBA courseという名前からもわかるように、会計学部で開講されている国際プログラムで、はじめからその英語版国際プログラムにタイ人の学生と留学生が登録しているのです。割合から言いますと、留学生は大体1割ぐらいです。私が担当していたクラスでも、60人ぐらい学生がいて、そのうち留学生は10人前後に過ぎません。50人ぐらいは地元のタイ人の学生です。

授業を担当している教員には、もちろんネイティブスピーカーのアメリカ人やニュージーランド人の先生もいますが、多くはタイ人や、私を含めて近隣のアジア諸国から来ている英語がネイティブではない先生たちが占めており、中国人、シンガポール人、韓国人も教えています。留学生についても、英語がネイティブであるアメリカ人やイギリス人の学生は非常に少数派で、ドイツやフランスなど、非英語圏のヨーロッパ諸国から来ている学生が多いようです。

ですから、英語で授業をするということは、英語を母語としている学生に英語を母語としている先生が講義をするのではないということなのです。それは、こうしたアジア諸国、特にチュラロンコン大学での国際プログラムなどの経験からわかったことです。

また、先ほど述べましたように、そこにいる学生も、留学生は1割ぐらいに満たないわけで、ほとんど地元のタイ人学生が国際プログラムに登録しているわけです。つまり、基本的に留学生を誘致するためにやっている日本のG30などの政策が間違っているかどうかはわかりませんが、どうも世界の国際プログラムは、そういう方向に向いていないのでは、という気がします。

つまり、地元の学生のために国際プログラムを開講しているのです。そこに留学生も一緒に入ってもらい、国際的な環境の中で一緒に学んでいくという環境

づくりをしています。そして、そこを出た学生というのは非常に国際的に活躍をするようになるし、BBA、つまり学士課程を出た後も、修士課程、博士課程等で海外の大学に容易に留学するようになり、留学先から帰って来た学生が国際プログラムで教えるようになっていく、という具合になっていますので、必ずしも留学生を誘致することが、英語での授業を開講することの目的ではないのではないかと気がします。これはアジアの大学で授業をした経験から見えてきたことなのですが、先ほどのご質問の1つに答えるような形になっているのではないかと思います。

ですから、必ずしもネイティブスピーカーのように教える必要は全然ないと思います。おそらくネイティブスピーカーの先生がペラペラとやるよりも、私などがボソボソやる方がタイ人の学生にとってもわかりやすいのだと思います。皆、授業にもちゃんとついてきてくれましたし、わかりやすいと言ってくれたので、そういうものではないかと思っております。

少し話が長くなってしまいましたが、Erasmus Mundusのプログラムについてご紹介いたします。大阪大学は、Erasmus Mundus Eurocultureというプログラムの域外パートナーになっています。このプログラムに大阪大学は2008年から参加しており、毎年10月～12月の間にヨーロッパのコンソーシアム校、スペインのデウスト大学、ドイツのゲッティンゲン大学、オランダのグローニンゲン大学、ポーランドのクラクフ大学、チェコのオロモウツ大学、スウェーデンのウプサラ大学から、学生が大体5名ぐらいやって来て、大阪大学の大学院文学研究科の修士課程に設けられている授業を履修するのです。

その授業はここにありますが、歴史、思想、文学、美学、政治経済関連の授業を提供しております。私はその中でも思想関連を受け持っていて、Contemporary Japanese Thoughts (現代日本思想論)という授業を提供しています。この授業では、戦後日本の市民運動の思想を扱っています。

現代日本思想論ということで、日本の市民運動の思想という授業をやっているのですが、その内容は別として、どういうことが授業を作っていく上での課題なのかということについてお話ししたいと思います。授業は10回で完結します。その10回の授業をどのように作っていくのか、1回1回の授業をどうするかというよりも、10回の授業全体をどうデザインしていくのか、つまりコースデザインの観点から考えていかなければならないと思います。コースデザインをする

際、どうしても我々は、自分自身の専門の立場から専門の知識を相手に伝えようとしてしまいがちですが、特にこの Erasmus Mundus のような授業の場合は、Erasmus Mundus Euroculture という枠組みの中で、授業に参加してくる受講生のニーズはどういうものなのか、受講生はどういうことに関心があるのか、ということ考慮に入れた上で授業を提供しないと、学生にとって関心のないことを教えるということになってしまい、結果としてうまくいかないということになってしまいます。私は、この授業を2008年と2009年の2回やっておりますが、学生の関心にできるだけ合わせようと努力しました。

文学部関連の事柄を教える場合、これは理系の先生と話が合わない点の1つなのですが、理系の場合は教える内容がカッチリ決まっているわけです。教科書がきちんとあり、英語で書かれたものもたくさんあります。ですから、それをきちんと教えていけば授業は成り立つのですが、我々の場合は、およそ典型的な教科書というものはありませんし、あったとしてもほとんど役に立たないというのが実情だと思います。それぞれの先生方の一つひとつの授業が全部オリジナルなものであるというのが、我々の世界での常識だと思って良いと思うのです。オリジナルな内容を、10回なら10回の授業でどうストーリーを作って相手に伝えていくのか、相手と一緒に学んでいくのかということになりますので、教科書というのはほとんど当てにならないところが、特に理系の授業の場合と異なる点になり、文学部の特色になってくると思います。

また、どういう授業スタイルでやるのかということも非常に重要な問題になってきます。知識伝達型・講義型の授業をしようとしているのか、それとも、ディスカッションなどを交えながら学生と一緒に学んでいくといったような、双方向型の授業をしようとしているのか、こちら側が意識的に「このようなスタイルでいく」ということを始めに決めておかないと、非常にわかりづらい授業形式になってしまいます。

さらに、1回の授業で、どのように時間配分をするのかということも重要です。日本人の学生もそうだと思いますが、留学生の場合も同じで、ずっと単調に話をしているとすぐに飽きてしまいます。ですから、最初の15分は前回の復習、次の30分はその日の内容の説明、残りの時間はディスカッションというように、きちんとメリハリを作って区切ってやらないと、特にヨーロッパ人の留学生は、つまらなくなると寝るというのではなく、勝手に本を読み出すとか他の人と話を

し始めるとか、露骨に態度で示してきます。それは相手が悪いのではなく、適切な時間配分でメリハリをつけてやっていないという信号を相手が発しているのだと、受け止めなければならないと思うのです。

それから教材の問題です。テキストやプリント等の資料、また、パワーポイントのスライドなどの準備に関しても、Erasmus Mundus のように10回で完結するような授業の場合、来年や次の学期に続くということがなく、その10回で終わってしまいます。ですから、その10回の授業で、どのテキストのどの範囲を扱って、何月何日のどの授業のときにはどの資料を読めば良く、そのときに使うスライドはこれだというようなことを明確に対応させておかなければ、10回などあっという間に終わってしまうことになると思います。

私がおその授業で使っているテキストを持って来ました。これは、鶴見俊輔が英語で書いたもので、“An Intellectual History of Wartime Japan”（戦中期の日本思想）と言います。主にこのテキストの中から転向の問題を取り上げました。後からお見せしますが、転向がどういうことかを学生にわからせるのはすごく難しいのです。ただ、非常に面白い話なので、それをやっているのです。

また、こちらは、戦後期を扱った“A Cultural History of Post War Japan”という、やはり鶴見俊輔の著作です。また、小田実の「玉碎」という小説をドナルド・キーンが訳した英語版が非常によくできていて、これを2回で読みます。日本人の学生と英語でやったら、多分2回では終わりません。ところがヨーロッパ人の学生は英語がよくできるので、これを2回で全部読むことができます。そういう面では日本人の学生に授業をするよりも効率が良く、読んで来るようにと言いますと50ページぐらい平気で読んで来て、日本人の学生のように「3ページくらいしか読めませんでした」というようなことはありません。また、留学生はディスカッションが好きですので、ディスカッションの時間を後半の20分なり30分なり、必ず取るようにしています。

また、最近の学生はパワーポイントのようなものを作るのも上手です。留学生に、パワーポイントのスライドでプレゼンテーションの準備をして来るように言えば、たちどころに準備して来ます。そうした視聴覚教材などを活用することが大事だと思います。

コースデザインの6つの原理というものがあって、今日お配りさせていただきました。これは後から説明しますが、大阪大学にあるサイバーメディアセン

ターというところと関係部局で一緒にやっている仕事で、その中に資料が入っています。長い名前ですので正式名称は忘れましたが、大学教育のグローバル化に対応したFD支援事業というのをやっています。その中で、英語での授業をサポートするためのe-learning教材の作成をしていて、たまたま私はその担当をしているのですが、Web上で自学自習ができるようなe-learning教材を作っているのです。その中のChapter 6をやっていますので、ご関心のある方は、DVDを見ただけであればと思います。

コースをデザインするときは、この6つの観点を必ず念頭に置くべきです。もちろん内容 (content) が重要なことは言うまでもありませんが、どのようにコース全体を組織 (organization) していくのか。あるいは学生との関係 (relation) をどう作っていくのか。これは、先ほど申しましたように、講義スタイルでやるのか、それともディスカッションを交えたような双方向的なスタイルでやるのかということです。それから、テキスト、資料、視聴覚教材などの support。評価を最終的にどうするのか、テストかレポートかという assessment。実際の授業の際の presentation、これは教員のプレゼンテーションの問題でもあるし、学生にプレゼンテーションをさせる場合、学生のプレゼンテーションの問題でもあります。こうした6つの観点を常に意識してやる必要があるということです。

授業のスタイルに関しては先ほど触れましたが、どちらが良いという問題ではないと思います。例えば、理系の授業などで伝達しなければならぬ知識が膨大なものである場合は、いわゆる注入型にならざるを得ないこともあると思います。しかし、私たちのような文学系の場合には、やはり双方向型の授業を目指すべきではないかと思います。

さらに最近よく言われていることですが、学習者中心型の授業をやるという動きがあります。どういうことなのか簡単に言うと、「教えない」で「学ばせる」ということなのです。これは実際にやってみると非常に有効なことで、ちょっとしたことで変わってきます。特に英語で授業をする場合すごく有効で、ちょっとしたことで、教えずに学ばせることができます。

それはどういうことかと言うと、何か新しい概念を導入するときに「この概念はこういうものだ」と頭から教えるのではなく、「これは一体何だろうか？」というふうに学生に問いかけるのです。後で私の授業をお見せしますが、まず学生に問いかけ、考えさせま

す。後でお見せするものの中に practical truth という概念が出て来ますが、そのときに「一体これは何なのだろう？」と学生に問いかけるのです。「truth (真理)」というような普遍的なものに practical という形容詞が付いているのはなぜなのだろう？」というふうに学生に問いかけることによって、時間稼ぎをすることもできますし、そこで学生に考えさせることもできます。そのようなちょっとしたことで、一方的に教えることから、学生に主体的に学ばせるという形へと授業のスタイルを変えていくことができると思うのです。

今から見ていただくものは、10回の講義の流れです。この講義では、実は最後の3回、ゲストスピーカーを呼んでいます。タイのチュラロンコン大学の先生で、宗教学の立場から日本の新興宗教の研究をしておられるのですが、その方に、日本の新興宗教についての話を3回してもらっています。ですから、私を中心になって話をするのは7回なのです。

この授業では久野収、鶴見俊輔、小田実という3人の思想家を扱っています。そのうち、特に転向の問題を扱った第5回のところを見ていただこうと思っています。これからDVDでお見せしますが、はじめに、転向とは何かということについて、先ほど回覧しました鶴見俊輔が書いた本、さらに英語で書かれた論文を3篇ぐらい選んで、学生に予習という形で読んで来てもらいます。そして、それについて解説をした上で、ディスカッションに進んでいくという段取りでやっています。

どのように授業を進行するかと言いますと、ここが一つ工夫なのですが、単に読んで来いと言うのではなく、質問を考えて来るよう学生に言うおきます。具体的には、「3つ質問を考えて来なさい」と言うおいて、紙に書いて出してもらいます。口頭ですと、こちらの英語力が足りないこともあって正確に理解できないこともあり、聞き漏らすこともあります。しかし、紙で提出してもらえば、相手の質問が何であるかを確実に押さえることができます。

そして、授業中には、授業内容の解説をすると共に、出してもらった疑問をもとにディスカッションをやりまます。さらに、次、あるいはその次の回に向けて何をやって来れば良いかという予習内容を示すようにしています。

今から見ていただきますのはちょうどこの部分です。疑問を提出してもらい、ディスカッションに入っていくあたりの授業です。心がけていることはアイスブレーキングです。毎回、いきなり授業はしないで、

はじめに雑談を少しします。その週にあったことや学生が関心を持っているような事柄について雑談をし、アイスブレイキングをしてリラックスしたムードを作るといことです。

また先ほども触れましたが、質問というのは学生が教師に向かってするものだけではなく、学生に対して教師がたくさん質問を投げかけるということをやっています。学生に単に説明するのではなく、問いかけて考えさせるということを心がけています。それが双方向的な授業を作る上での一番のポイントだと思うのです。学生に質問をして考えさせるということを授業中に実践していくといことです。

それから、学生の意見を確認することが大切です。英語でコミュニケーションをしていますと、言葉の問題もあり、相手の言っていることを正確に把握できないこともあります。正確に把握しないで進んでいくと、議論が途中からどんどん雑駁になっていき、きちんとした授業にならなくなります。ですから、相手の言うことがわからないときは、「あなたが言いたいことはこういうことですね?」と、何度でも確認することが大事だと思います。

次に、学生の発言をコントロールするといことです。学生に好きなようにどんどん話をさせると、收拾がつかなくなります。ですから、英語で授業をするとき、ディスカッションを重視するといっても、あまり自由に話させないことが重要です。相手の発言を上手にコントロールすることが大事だと思います。

具体的に言いますと、学生が長くしゃべってしまったとき、何が言いたいのかよくわからないといことがあります。それは我々の場合でもそうだと思いますが、学会などでもそのようなことがよくあるのではないのでしょうか。質問しているのかコメントしているのかよくわからない先生がいて、「この人は、質問ではなく、自分の言いたいことをずっと言っている」と感じるこが、学会などでもよくあると思います。それを学生にさせないようにすることです。ですから、学生が長くしゃべってしまったときは、「今言ったことを短い言葉でもう一度まとめてくれ」というふうに要求するのです。例えば、“Can you summarize what you say in two or three sentences?” などと言ったりします。あるいは、隣に座っている学生に、「クラスメートが言ったことを理解できるか?」というふうに聞くのです。そして、その学生にほかの学生が言ったことをまとめさせるのです。

これは労力の節約になります。自分からまとめず

に、ほかの学生を当てて、「隣の〇〇さんが言ったことが僕にはよくわからなかったが、君はわかるか?」といって、相手に説明させるのです。そういう授業のテクニックは大事だと思います。そうすると、ある学生だけがずっとしゃべっているといのではなく、ほかの学生も議論に参加するようになりますし、しかもこちらのリスニングの力が弱い所をそれで補うことができます。せこいようですが、そのようなことはテクニックだと思っています。そうやって学生の発言をコントロールし、ディスカッションをちゃんとクラス全体でシェアするようにしていかなければならないとい思います。

そのためには問いの技法が必要です。問いの技法といのは、私の関心の所で少し述べた philosophical practice の1つなのですが、問いをコントロールすることで、問答をコントロールしていくといことです。ですから、どういう質問を発するかが大切です。質問を発するとき、雑駁な質問を発するのではなく、yes/no で答えられる質問なのか、3つの選択肢のうちの1つを選ぶ質問なのか、what で聞いているのか why で聞いているのか how で聞いているのか、そのようなことを明確にして質問していくといことなのです。

例えば、ある事柄に対して「このような意見があるが、それに賛成するのかしないのか?」と yes/no で聞いたときに、学生が yes でも no でもないようなことを長々としゃべったときには、ぜひ yes なのか no なのかといことを執拗に追求して、どちらかに決めさせるなど、そのようにしてコントロールするといことなのです。

授業をする上でのいくつかのコツについて、経験から言いますと、原稿は作らないほうがうまく行きます。講義スタイルの場合には、学会や研究会で外国語で発表するときのように、原稿を作ってやっても何とかなることがありますが、少なくとも双方向的な授業を目指そうとした場合、原稿を作るとかえってうまく行きません。原稿は作らないほうがうまく行きます。むしろ、箇条書きにしたメモ程度のものを準備して、後はぶっつけ本番で自分の英語力を信じてやっていくほうが必ずうまく行きます。要するに、ポイントをもらさないように箇条書きでメモしておく程度で充分だとい思います。

また、パワーポイントに頼りすぎないといことも大事です。今はこのようなプレゼンテーションなのでパワーポイントを使っていますが、パワーポイントに

頼りすぎるとトラブルもありますし、脱線することがすごく難しくなります。要するに、決められたシナリオどおりに進んで行かないと授業が成立しなくなってしまうので、脱線したり違う意見が出て来たりしたときに方向を変えていくことが難しくなり、最後まで自分で作ったシナリオどおりに進めなくてはならなくなってしまう。パワーポイントは確かに便利なのですが、全面的に頼るとかえってうまく行かないということがあります。

オーソドックスですが、やはり黒板を活用することが非常に重要だと思います。黒板を活用することのメリットは、教師が話をしているのと、板書をしているのと、学生がノートを取ったり考えたりするのが同時に進むということです。ですから、非常に自然に、話と、学生の思考のプロセスと、板書とが同時に進行していきます。パワーポイントだと、どうしても一方的にスライドが次々に替わって、学生がついて来られないこともありますし、学生が考えずにただボーッと見ているだけということが、英語・日本語の授業に関係なく、あると思います。

ですから、黒板を見直すことはすごく大事だと思っています。最近はパワーポイントを使わないと、悪いことのように言われるのですが、それは違うと思います。特に英語の授業の場合、黒板を使うほうがうまく行くということが、経験上わかってきました。

また、アイコンタクトが大事です。受講生の目を見て話すということです。最初はびびって、上のほうを見たりよそ見をしたりしてやりがちなのですが、しっかりと学生の目を見て話すことは、非常に単純なことですがすごく大事なことです。誰に向かって話をしているのかということをはっきりさせることはすごく大事です。そういう非常に単純なことがコツだと思います。

最後にまとめますと、我々は英語を教えているわけではないのです。我々は英語の先生ではないのです。英語を教えるのではなく、英語で教えているのです。ここの所を勘違いしないようにしなければなりません。英語はただの道具だということです。ですから、英語そのものが間違っている、ちゃんと伝わってディスカッションができればそれで良いわけです。

むしろ重要なことは、全体のコースあるいは各回のクラスをどのように組み立てていくか、そういったことに、日本語で授業をするとき以上に意識的になる必要があります。日本語でうまくできないことが、英語でうまくできるはずがないのです。ですから、むしろ

英語で授業をするということよりも、コース全体や1回1回の授業をどのように構成するかということについて、日本語でやるとき以上に、意識的に注意深く教授法等を工夫することが、やはり一番大事なのだと思います。

具体的に言いますと、先ほど見てきましたコースデザイン、どのようなスタイルで授業をやるかという自覚、あるいはアイコンタクトを含めた言語表現なり身体表現も大事だろうと思います。そのようなことに意識的になることが、とても大事なのだと思います。

授業の組み立てに関して言語表現のレベルで意識的になるということは、次の事柄に進んでいくときに、ちゃんとそれを英語で言うということです。例えば、“Let’s go on to the next part.”とか、“Please look at page ~.”とか、何をやろうとしているのかということを手相手に明確に伝えながらやるということが大事なことだと思います。要するにメリハリをつけて、次は何をしようとしているのかをきちんと英語で伝えていくということです。このようなことは日本語でもそうだと思いますが、多分我々は、日本語で授業をするときにはそういうことをあまり意識的にやっていないと思います。

ここで、少しビデオを見ていただきたいと思います。

〈ビデオ上映〉

先ほども見ていただきましたが、解説のときに使うパワーポイントはこのようなものです。ただ、パワーポイントも使いますが、復習するときには黒板に書くという具合に使い分けています。講義スタイルで一方的に解説するときには、パワーポイントを使ったほうが有効だと思いますし、学生とのディスカッションを主にやるときには黒板を使ったほうがうまく行くように思います。その場面場面で、今日はどのような授業スタイルでやるのかということを確認し、パワーポイントを使うのか、黒板を使うのかというようなことを、そのときの授業スタイルに合わせて使い分けていくほうがうまく行くような気がします。

この授業では最後に学生に授業評価をしてもらっており、「時間配分は良かったか」とか「説明は明確だったか」というようなアンケートを取っていますが、幸い学生からは良い評価をもらっております。

先ほど言いましたが、学生のプレゼンテーションの回を1回設け、それぞれの出身国での市民社会運動や

学生運動などについて調べさせ、パワーポイントのスライドを作ってもらって発表させています。1回の発表時間は1人当たり15分ぐらいの短いものです。ちなみにどういふ発表があるかと言いますと、このドイツの学生は、このようなものを準備してくれました。ドイツの平和運動、ドイツにおける女性運動、女性の平和運動といったようなものとか、我々が全然知らないようなものも出て来て面白いのですが、一方、これはポルトガルの学生の例です。

この授業は2年間やりましたが、いろいろな国の市民運動や学生運動などについてこのようなプレゼンテ

ーションを学生にやってもらい、私も、世界にはこんな市民運動や学生運動があるのだということを知ることができて、とても勉強になりました。そうした学生から仕入れた知識をもとに、今年の6月にオランダのグローニンゲン大学で Euroculture の学会があるのですが、そこで「日本とヨーロッパの市民運動の比較について」といふ発表をします。この授業の成果を活用させていただいております。

私の発表は以上です。残りの時間でディスカッションができると思います。ありがとうございました。

司会：望月先生、ありがとうございました。いろいろと興味深いお話を伺えたわけですが、質問もまたたくさんあるのではないかと思います。いかがでしょうか。

Q：最初のコースデザインの中で、受講生のニーズや興味は何かということを重視する必要があるというお話でしたが、事前にシラバスを作る段階、つまり受講生もまだ決まっていない段階で、どのようにして受講生の興味やニーズを知り、翌年度の授業のシラバスを作ることができるのかということが、私自身も抱えている大きな問題なのですが、その辺はどのようになっているのでしょうか。

望月：それは確かに難しいと思いますが、この Euroculture の授業の場合ですと、この授業に来る学生というのは大体同じような関心を持って来るといふことがわかっています。Euroculture の学生というのは、必ずしも文学部のようなところから来ているわけではないのです。基本的には、学際的な Euroculture Program に所属している学生なので、古い歴史的なことよりは現代のことに関心を持っていますし、主にヨーロッパのことを勉強していますので、ヨーロッパの文化との関連で日本文化に関心を持っています。つまり、別に日本文化に関して深く専門的に追求したいとも思っていないわけです。ですからそのような学生には、逆に、浅く広くやったほうがニーズに適合しているということになります。日本の思想・哲学等についてあまりにも掘り下げすぎたことをやりますと、かえって退屈になってしまうということがわかっていますので、できるだけ一般的な話をするように心がけています。ですから、Euroculture というプログラムに来ている学生という認識で準備しているわけです。

Q：ありがとうございます。

司会：ほかは、よろしいでしょうか。

Q：とても楽しく見せていただきました。受講生が5人というのは本当に素晴らしいと思い、また望月先生ご自身、幸せそうに講義しておられていて、それでお聞きしたいのですが、もっとたくさん持たされることはないのでしょうか。また、学生との関係づくりといふのは非常に大切だと思いますが、コンパなどはなさるのかということ、また、どう名前を呼び合っているのかということをお聞きしたいのですが。

望月：実は、ほかにも1つ英語で授業をやっておりまして、それは文学研究科の専門の授業で、日本近代哲学に関する授業を、非常勤で来ていただいているフランス人の先生と一緒に持っております。それも、英語のネイティブの人ではない、私と英語能力があまり変わらないぐらいのフランス人と一緒にやっています。そのような意味では、もう1つ英語の授業を持っています。

文学研究科でも、日本近代哲学などに関しては、英語で授業を聴いている留学生にもできるだけ授業を受けてもらおうということで、もっと専門的なことをやっております。西田幾多郎や三木清など個別の哲学者について、英訳のある文献を使いながら実際にテキストを読むという、むしろ普通の哲学の授業に近い形でやっています。それも人数が少なく3人で、韓国人とデンマーク人の留学生に日本人の学生が1人加わっています。

Euroculture の授業では、学生と1回エクスカーションに出かけます。去年の場合ですと、先ほど言いましたように、タイの大学からゲストスピーカーを招いて、日本の新興宗教についてのお話をしてもらった関係で、天理市に行き、天理教の建物をいろいろと見せてもらって、見学して来ました。観光も兼ねているの

ですが、そのようなエクスカージョンに出かけるというようなことをしています。その前の年には、学生と一緒に大阪の立ち飲み屋へ、「こういうのも大阪のスタイルだ」ということで飲みに行きました。

英語の授業をやっている場合は、基本的に学生とはファーストネームで呼び合うのが普通ですので、そのように呼び合っています。

もう1つ加えますと、大阪大学でやっているEurocultureの授業に関して、学生から1つだけ不満が出ています。5人でやるのはとても良いのですが、留学生は「なぜ日本人の学生がもっとこの授業に来ないのか」ということを毎回言います。自分たちは、留学生だけで囲い込まれるよりも、日本人の学生がもっとたくさんいる教室で、日本人の学生と一緒にディスカッションしながら考えたいということを毎年言っています。これは我々にとっても課題だと思っており、そのためにはいくつか越えなければならないハードルがあると思っています。

まずは英語力の問題です。教える側の英語力の問題もありますが、留学生と日本人の学生をミックスしたクラスを作ろうと思うと、どうしても日本人の学生の英語力が留学生に比べて劣るということができてしまうのです。このEurocultureの授業の場合、Erasmus Mundusの公式基準ではTOEFL580点以上ということになっているのですが、実は大阪大学あたりでも580点を超える学生というのはなかなかいないのです。580点というハードルを設けることによって、日本人の学生が参加できなくなっているのです。580点に達していなくても良いと言えればいいのですが、大阪大学だけで勝手にそうすることもできなくて困っています。ただ、その所は何とか緩和措置をもって、日本人の学生が参加できるようにしたいと思っています。それが実際に留学生のニーズですし、留学生だけを囲ってやることは非常に問題だと思っています。

Q：もう1つだけ。6大学ですよね。6大学全部で5名なのですか。

望月：6大学なのですが、必ずしも5名ということではなく、たまたま今年は5名だったということで、もっと多いことも少ないこともあり得ると思います。たまたま去年も一昨年も5名だったというだけの話だと思います。

Erasmus Mundusの場合は、ヨーロッパの中で学生が動いていて、そして、そのうちの1学期間を域外パートナーの大学で勉強するということになっています。それがたまたま大阪大学だったということで、大

阪大学ではなくアメリカの大学のこともあり得るし、インドの大学のこともあり得るということです。

Q：ありがとうございます。

司会：ほかは、いかがでしょうか。

Q：英語の授業を2コマやっていらっしゃるんですが、仮に、学部1年生から修士の2年生まで、毎年ではないにせよ学年に合ったレベルの英語の授業をした場合、並行して日本語の授業を受け持つ可能性があるとする、準備の時間やコースのコーディネートなど、物理的に維持できるのでしょうか。先生ご自身のお考え、または大阪大学がどのような見通しを持っているのか、お聞かせください。

望月：そこは最大の問題だと思います。大阪大学でもG30を動かそうとしているわけですが、授業担当者の負担をどうするかというのは、一番難しい所だと思います。私自身としてもそんなにたくさんやりたくはありません。やはり一定の限度というものがあります。一般教育も含めて普通の授業もやっていますので、そんなにたくさんできませんから、どう頑張っても英語の授業を2つ、そのほかにも講義を持つということであれば、4コマぐらいが限度ではないかと思います。それ以上やるとなると、それぞれの授業のクオリティが下がってしまいますし、その所は本当に難しいです。そこは最大の問題だと思っています。

司会：ほかは、よろしいでしょうか。

Q：今のお話をお聞きしながら、果たして自分にはどのような授業ができるのだろうかと思いました。結局思想系であれば、こういう場合、やはり日本近代のそのようなものに限られてしまうのではないかというおそれを感じているのです。ほかにどのような可能性があり得るのか、今までのご経験を通して何かお考えがあればお聞きしたいのですが。

望月：我々、哲学・思想系の人間にとっては、日本思想、日本近代哲学や日本関連の思想というのは、1つのチョイスだと思うのです。私の経験では、先ほども触れましたチュラロンコン大学のBBA programに哲学、論理学という一般的なコースがあり、その中で、critical thinkingの授業を受け持っています。特に哲学系の教員にとって、これから必ず課題になってくるのは、critical thinkingと呼ばれているものをどう教えるかということだと思っております。多分、critical thinkingは、英語でやる授業に対して非常に適合性が高いと思いますので、哲学系の我々ができる英語の授業として期待されているものの1つだと思っています。

もう1つの経験は、これもチュラロンコン大学でや

ったのですが、先ほど紹介しました授業をやりながら、チュラロンコン大学の文学部の哲学科でセミナーを1つ持っていました。それは、デカルトの方法序説を、日本人の私がタイ人の学生に英語で教えるという授業でした。多分、日本では違和感を持たれるかもしれませんが、タイの大学でやった限りは、別に何の違和感もなく受け入れられていました。従って、グローバル化している時代においては、何人（なにじん）が何を教えようと、別に良いのではないかと思います。実際、そのときの経験は非常に目からウロコが落ちるようなものでした。

そのとき教えながら教わったのは、デカルトの方法序説を英語で読むというのは私自身初めて経験しましたので、「なるほど、英語にはこう訳すのだ」という意味で勉強になったということです。我々がドイツ語やフランス語で読んでいたテキストをたまに英語訳で読んでみるというのも、とても勉強になるという感じがしました。これはフランス文学やドイツ文学をやっている先生方にもお勧めしたいことなのですが、英語で読むとどうなるかというのは、最初は皆、拒絶反応を示すのですが、やってみると絶対に面白いと思います。

ついでに言いますと、これは日本文学の先生と話していたのですが、今、日本文学研究は非常にグローバル化しているそうです。特にアメリカを中心として、英語で日本文学を研究し、英語で論文を書き、そして大学に就職して研究者としてやっていくという、英語で動いている日本文学のマーケットというものが確実に存在し、英語ができない日本の研究者や教育者は、そのマーケットから締め出されてしまっているそうです。

つまり、就職が厳しくポストドクがたくさんいるような状況の中で、なぜ日本の文学研究科で日本文学を専攻した研究者や教員が、例えばシンガポールや韓国の大学で教えられないのかという問題があります。英語で教えられないのかということを行っています。そういう意味で、例えば日本文学ですら、英語で論文を書いて就職していくというマーケットが現実には存在しているわけなのです。

ですから、どのような分野でも英語でやって損はないと言いますか、マーケットを広げるという言い方はあまり適切ではないのかもしれませんが、現実問題として、大学院生等の就職マーケットを広げるという意味においても、どのような分野でも英語でやって損はないのではないかと、私は最近思っています。

例えば、さっき申し上げたタイの大学で日本の宗教を研究されている先生も、アメリカのペンシルベニア大学で日本地域研究ゼミを取っており、彼女の場合も、すべての論文を英語で書いているんです。別に日本を研究しているからと言って、日本語で論文を発表したりはしないのです。ですから、そのような意味でも、やはり英語は国際言語になっているということを痛感します。

Q: 大阪大学では、こういう取組みが結構進んでいるわけですが、ただ、実際に英語で授業をやるということになると、やはり、できる先生に集中してしまうということはありませんか。

望月: 集中すると言いますか、Erasmus MundusのEurocultureの授業でも、先ほど触れましたように、歴史、文学、思想、美学、政治経済の5つのコースを提供していますが、実は文学研究科の教員が担当しているのは、そのうちの3つなのです。1つは非常勤に外注しており、1つは他研究科の先生にお願いしているという状態なので、私を含めて文学研究科の専任教員が担当しているのは3つのコースなのです。

一度やり始めますと、毎年その3人の中に私が入ってしまっていて、私自身、「今年ぐらいまではやりますが、その後は約束できないかもしれない」と言っていますが、やはりそれが問題なのです。もっとその経験を広げていかないと、「あの授業はあの人がやるものだ」ということになってしまいがちなので、3年ぐらいやったら降りたほうが良いのではないかと私は思っています。そういうノウハウは伝授して、ほかの方々にやっていただくほうが良いと思います。

Q: やはり少しハードルがあると思いますので、広げていくにはどうしたらよいのでしょうか。

望月: 担当者でこういったセミナーの機会を持ってノウハウを共有すれば、ほかの方にも必ずできると思います。とにかく、同じ人ばかりがやらないほうが良いと思います。

司会: ほかは、いかがでしょうか。

Q: 私は日本近代史をやっています。留学生センターというところで「日本文化の講義を英語でする」というプログラムが一度ありました。私は英語がしゃべれませんので、わざわざ要旨を書いてそれを翻訳してもらい、通訳を付けて、日本天皇制の講義を1コマだけやったことがあります。私のやっている天皇制や日本文化については、やはり日本に来ている留学生に広く教えたい、教養教育の一環としてやるべきだと思います。

今日のお話はヨーロッパの大学との連携ということでしたが、一般に語学留学で来ている学生や日本語がしゃべれないで来ている学生に対しても、日本の文化なり社会なりの特徴を伝えて理解してほしいということがあります。ただ、それを実践するのはなかなか難しいと思うのですが、大阪大学全体で、英語で日本文化なり日本の社会を教えるようなプログラムは、行なわれているのでしょうか。また、それを実現するにはどの程度の時間が必要なのか、その辺りについてはどのようにお考えでしょうか。

望月：日本の文化や社会を教えるプログラムは、やはり留学生センターが主催している短期留学プログラムの中にあります。留学生センターが責任を持っているものです。それはオムニバス形式になっており、テーマは毎年違います。文学研究科に回って来る年と来ない年があり、いろいろな所が持ち回りでやっていて、経済の年もあるし理系の年もあるという具合に回って来ます。その場合はオムニバス形式ですので、1人の先生が1回ないし2回担当するという形です。おっしゃられたように、英語ではできないという先生には通訳を付けたり、いろいろやっています。その授業は私自身も担当しており、再来年はそれもやらなければならないのですが、ただ、私自身の個人的な好みから言いますと、1回や2回だけ担当する授業というのは、あまり面白くありません。

やはり10回ぐらいやらないとやった気がしないと言うか、そのぐらいやったほうが受講生とも密に付き合うことができますし、「この学生は何を考えていて、どのようなことに興味があるのか」ということがわかってきますので、そのほうが面白いと思います。そういう意味では、オムニバス形式のものよりも、1人の教員が少なくとも10回ぐらいやるもののほうが実際うまく行くと思います。オムニバスはあまりうまく行かないという気がします。

Q：大阪大学では、英語で教えることに関して、何か大学全体としてFDと言いますか、そのようなものは行われているのでしょうか。

望月：それがまさに、持って来たこのパンフレットなのです。G30もありますし、英語での授業のニーズが高まっているということもあり、文部科学省の特別何とか予算というものを取って、5年間5,000万円ぐらいでサイバーメディアセンターが中心になってやっている取組みです。このe-learning教材を使って、全学的に英語での授業をサポートすることにしています。

これは始めてまだ2年目で、今試験運用中ですので一般公開はしていませんが、もしご関心がある場合は、ここにあるアドレスにアクセスしていただければコンタクトが取れますので、メールでご連絡いただければ限定的にパスワードを差し上げることができ、作ってあるものについては見ていただくことができます。

初年度は理系の講義について教材を作りました。理系の講義を英語でやっている先生方を取材し、どのように講義をしたかということについてサンプルをたくさんupしています。去年は、経済学など文系の講義を英語でやっている先生方を取材し、そうした先生方へのインタビューや、実際の授業の映像などをupしてあります。順次そのようにして、次の年は理系のセミナー形式の授業、そして文系のセミナー形式の授業というように、いろいろな授業のタイプに応じてサンプルをたくさん取材して、それぞれの先生に、どのようにしたら授業がうまく行くかということについてインタビューをして、練習問題などの教材も一緒に作っています。限定的に公開しておりますので、もしご関心のある方はご連絡いただければと思います。

Q：これは、希望者が受講するという形なのでしょうか。

望月：Web上に上げていますので、公開されれば、どこからでもアクセスできます。いわゆるWebCTと呼ばれているものです。

司会：ほかは、いかがでしょうか。

Q：欧米の人たちに日本人の宗教観を説明するとき、苦労されることはありますか。

望月：欧米の人たちにと言いますか、特に去年の授業では新興宗教の話をしましたので、ポルトガルやスペインなどの受講生の出身国にも新興宗教はあるか、などという話をしますと、新興宗教というのはやはりあるわけです。そのような話でだいぶ盛り上がりしました。なぜ新興宗教が発生するのか、宗教運動とその他の社会運動との違いは何か、なぜ人は新興宗教運動に走るのかなどのお話をしました。ひと口に宗教と言いましても、伝統的な宗教と新興宗教の場合ではだいぶ違います。現代の問題を扱っていますので、切り口として、新興宗教と現代の社会はものすごく関係があると思って、このようなことをやりました。そのような観点から話をしますと、現代社会の問題として問題が共有できて、面白いディスカッションができると思います。

Q：ありがとうございました。

司会：少し予定の時間を回っているのですが、ぜひという方がいらっしゃいましたら、いかがでしょうか。よろしいですか。では望月先生，どうもありがとうございました。

望月：こちらこそ，どうもありがとうございます

た。英語の授業は，とにかく一度やってみることだと思います。やってみると案外何とかなるものだということがわかりますし，結構面白くなってくると思います。

(一同拍手)